

# 新たな時代の エトランゼ

— パリへ渡った日本人画家たち 1950-70s —

野見山 暁治

NOMIYAMA Gyoji

赤堀 尚

AKAHORI Naoshi

笠井 誠一

KASAI Seichi

植田 寛治

UEDA Kanji

進藤 蕃

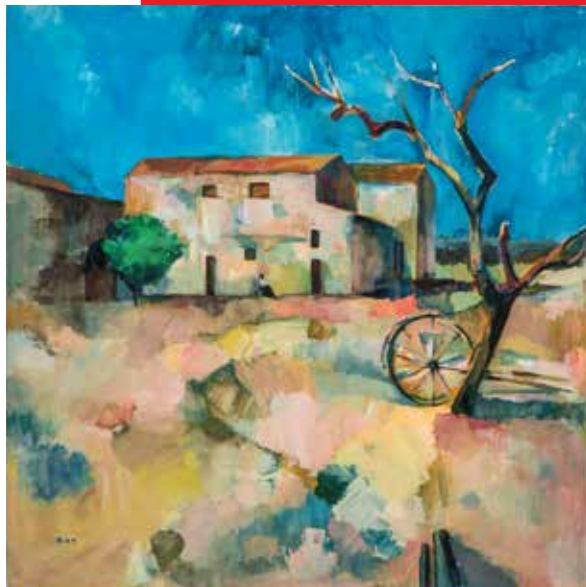
SHINDO Shigeru

入江 観

IRIE Kan

小杉 小二郎

KOSUGI Kojiro



## Etrangers du nouvel âge

2023.9.16 [土] → 11.19 [日] 開館時間 9:30 → 17:00 ※入館は閉館30分前まで

■休館日：月曜日(9月18日・10月9日は開館)、9月19日(火)、10月10日(火) ■入館料：一般730(650)円、大学生510(460)円、高校生以下は無料

※( )内は20名以上の団体割引料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料  
※第3日曜日「家庭の日」(9月17日、10月15日、11月19日)は、大学生は無料 ※11月3日(金)「文化の日」は、入館無料

主催：公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会、下野新聞社

KOSUGI HOAN  
MUSEUM OF ART,  
NIKKO



小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431  
栃木県日光市市内2388-3  
Tel: 0288-50-1200  
<https://www.khmoan.jp/>

上段左/赤堀 尚《シツタの海》1959年、個人蔵  
上段右/植田寛治《歩道の初秋》1970年代、個人蔵  
下段左/笠井誠一《ヴァイオリンと雲》1960年、名古屋画廊蔵  
下段右/入江 観《南仏の農家》1963年、進山 茂 氏蔵(小杉放菴記念日光美術館寄託)

※最新情報は当館ウェブサイト・公式SNS等でご確認ください。

# 新たな時代の エトランゼ

— パリへ渡った日本人画家たち 1950-70s —

NOMIYAMA Gyoji / AKAHORI Naoshi / KASAI Seiichi / UEDA Kanji  
SHINDO Shigeru / IRIE Kan / KOSUGI Kojiro



野見山暁治《岩上の人》1958年、東京国立近代美術館蔵



進藤 蕃《花と裸婦(Nu)》1962年、個人蔵



小杉小二郎《ピンとサクランボ》1973年、泉屋博古館東京蔵

Étrangers du  
nouvel âge

明治時代以降、アカデミズムから前衛に至るまで、日本の洋画に計り知れない影響をもたらしてきたフランス。とりわけ首都・パリには、本場の美術を学ぶことを切望した日本人洋画家たちが集いました。

第二次世界大戦を経た1950年代から70年代、次世代を担う若き洋画家たちが続々とパリの地を踏みました。日光出身の入江 観は、1962年に渡仏し、フランス国立美術学校でモーリス・ブリアンションに師事。帰国後は、青空の下に広がる風景を描くことで独自の画風を確立します。そして、1970年には、小杉放菴を祖父に持つ小杉小二郎も渡仏、長きにわたってパリに滞在し、静謐な心象風景を手がけてきました。

さらにこの時期、対象を解体し再構成して描く野見山暁治や、後に平面性を強調した静物画を手がける笠井誠一など、実に個性豊かな顔ぶれがパリに揃ったのでした。

本展は、1950年代から70年代にかけてパリを訪れた野見山暁治・赤堀 尚・笠井誠一・植田寛治・進藤 蕃・入江 観・小杉小二郎の滞欧作を、その前後の作品と展観することにより、この地での学びが彼らの画業にどのようにして活かされたのかを探るとともに、個性豊かな画家たちに彩られた現代洋画史の再検証を試みるものです。

## 【関連イベント】

出品作家によるクロストーク ※先着順(定員100名)・要入館料

■日時/10月14日(土) 14:00~15:30

■登壇者/赤堀 尚 氏 (洋画家・立軌会同人)

笠井誠一 氏 (洋画家・立軌会同人・愛知県立芸術大学名誉教授)

入江 観 氏 (洋画家・春陽会会員・女子美術大学名誉教授)

小杉小二郎 氏 (洋画家)

担当学芸員によるギャラリートーク ※予約不要・要入館料

■日時/9月16日(土)、10月7日(土)、11月18日(土)

各日11:00~(1時間程度)

## 【次回予告】

五百城文哉生誕160年記念 文哉と放菴

■2023年12月2日(土)~2024年1月28日(日)